＜口腔の役割＞　79

味噌なめ地蔵

沼田城主 2 代真田信吉（さなだ・のぶよし）公の墓が建つ沼田市の天桂寺（てんけいじ）。寺に沿って流れる城堀川（じょうぼりがわ）はその昔、沼田の城下町の上水道の役目を担い、現在も残る布積み石垣は16世紀のものと推定され、当時の真田氏繁栄の名残といわれます。

川のたもとの祠（ほこら）には 2 体の座像が並び、石板には「みそなめじいさん・ばあさん」と記されています。向かって左の地蔵は「奪衣婆」（だつえば）」、右の地蔵は「懸衣翁（けんえおう）」と彫られています。

もともと「奪衣婆」は、三途の川のほとりで亡者の衣服を剥ぎ取り、その衣服を「懸衣翁」に渡し、大木に掛けて枝のしなり具合でその生前の罪の重さを量ったとされます。

鎌倉時代以降、説教や絵解きの登場人物として定着していた「奪衣婆」は江戸時代後期より民間信仰の対象となり、その像は徐々に全国に普及、当初は庶民があらかじめ裁きの軽減のために祈っていたようですが、その後次第に疫病除けや咳止め、子供の百日咳に効き目があると信じられるようになりました。

さて天桂寺の「奪衣婆」は腕っぷしの強そうな「懸衣翁」とは対照的に、亡者の衣服を剥ぎ取る“鬼女”のイメージとはほど遠く、着物をまとい、ちょこんと正座し上品な印象です。そんな個性的な 2 体の地蔵には口元や身体のあちこちに味噌が塗りつけられています。

もともとこの地域では風邪をひいたり歯が痛むとき、石像の口の周りに味噌をぬり祈願すれば治ると言い伝えがあったようです。古来、民間療法として頭痛の際の発熱や打ち身、捻挫に対して味噌は患部の熱冷ましの効果があるとされていたのと同様に、この地域では歯痛の効果もあるとされ、この風習が生まれたようです。

全国の各地には寺院の本堂前にある常香炉で炊いた線香の煙を病んでいる部位に塗る信仰があることはよく知られていますが、これと同じように味噌を塗る信仰は群馬県のこの地域の他、山梨県、奈良県、鳥取県など各地に「味噌なめ地蔵」として点在します。

不思議な言い伝えを持つ天桂寺の「みそなめじいさん」と「みそなめばあさん」はその昔、口元に塗られていた味噌も、今では身体のあちこちに新しい味噌が絶えず、むし歯の他にも病に悩む人々に力を貸してくれています。

【歯科口腔外科診療部長　今井　正之】

沼田市材木町　天桂寺

城堀川と布積み石垣

みそなめ地蔵